

要 旨

1. 問題と目的

発達障害の診断過程において、発達検査は重要な位置づけの一つである。その中でも、ウェクスラー式知能検査は、子どもの認知特性を知りどのような支援を行うかを定める上で実施される機会が実に多い。

しかし、現実のレポートの活用者である保護者や教師（以下、「非専門家」と略す）からすると、アセスメントレポートに書かれていることがよく分からないという声を聞くことも多い。筆者自身が作成したアセスメントレポートもそのとおりであった。

このため、本研究では非専門家に理解できるアセスメントレポートの書式を探究する。

2. 方法

本研究ではアセスメントレポートに関する文献研究を実施し、アセスメントレポートに記載される共通の項目を明らかにした上で、WISC-IV検査の測定内容を平易な用語に置き換えた。また、これまで筆者が作成したアセスメントレポートと指導による修正を実施した結果、本研究の前後でわかりやすさがどのような変化を遂げたのかを検討した。なお、アセスメントレポートは、(1) 研究開始前、(2) 研究開始後、(3) 指導前、(4) 指導経過によるもの（第1回指導から第4回指導）とした。

3. 実践研究

専門家向けに記述された国内外のアセスメントレポート8例を選出し、アセスメントレポートに記載される共通の項目を一覧にした。その中で、共通性が少ない項目や専門用語を解説するために説明を加える必要があるものは除外した。

次に、各指標および各下位検査で測定される専門用語を、非専門家にも理解できるよう指導教官をスーパーバイザーとし、特別支援教育の専門家とともに平易な用語で表す検討を行い表を作成した。

研究開始前は、先達のアセスメントレポートの書式を活用し、記述も真似て作成した。

研究を開始した当初は、まず文献や関連する書籍などを活用して知識の習得に励んだ。しかし、それらは全て専門用語で記載されており、非専門家に理解できるアセスメントレポートの書式を探究するにはほど遠い状態だった。

そのような状況の中で作成されたアセスメントレポートは、読み手を意識することの重要性を認識したことにより徐々に筆者自身に変化した。

4. 考察

アセスメントレポートに関する実際の指導では、第1期の指導で対象児、生徒の能力の特徴は何なのかを明らかにすることについて指導がなされた。次に、受検者自身の能力の差は、どこに原因があり、それはどのような問題が予測されるのかについて容易に分かるように記述することも指導がなされた。最後に、今後の提案は不要であり、むしろ能力の特性に焦点を当てるように記述する指導がなされた。

第2期の指導では、各下位検査が何を測定しているかについて一覧にするように指導が

なされた。これは、ある下位検査の評価点のみが突出して低い場合、どういう不利益が生じるのかを非専門家に理解できるように説明できていないため、まずは基本を忠実に理解することに関して指導がなされた。

第3期の指導では、各下位検査の項目が学習に対してどのような役割を担っているのか、それらが欠落すると学習はどう影響するかを明らかにするように指導がなされた。

第4期の指導では、受検者に不得意なことが確認された場合、そのことを際立たせて記述するように指導された。

以上のことから、非専門家に伝わるアセスメントレポートを作成するためには、まず受検者の能力の特徴は何なのかを明らかにするという視点を意識することが大切であること。次に、検査者自身が各下位検査では、何を測定しているのかを正しく理解すること。最後に、能力の特性を踏まえて、配慮が必要なことを際立たせて記述することであった。

研究開始ならびに指導前後でのアセスメントレポートの変化については、研究開始前ならびに指導前は、一文が長く段落が変えられていないため、読みにくさや読むこと自体を躊躇させるものであった。

また、A4用紙4枚にのぼるボリュームとなり読むための時間と労力を使わせる割には、読みにくいレポートであった。さらに、専門用語を多用した記述がなされていた。

一方で、指導後はアセスメントレポート全体の容量としてA4用紙2枚に留めた。しかし、専門用語の使用については、第1回指導では非専門家に伝わるように説明しようとして一文が長くなる傾向にあった。全体の容量が減った理由は、提案は不要で、能力の特性に焦点を当てるように記述する指導を受けたことにより変化した。

第2回、3回の指導では、ある指標内の下位検査にバラツキが生じたことを説明する際、筆者自身が十分に咀嚼しないまま説明を行っているため、一文の説明が長くなり読み手の理解を阻害していた。

最終指導では、適切に段落が変えられており見やすさは改善した。専門用語の使用は、極力抑えられ各指標が測定する内容について平易なことばで説明がなされた。また、各指標にバラツキが生じたのか、生じなかったのかなどについても記述された

受検者の強みや弱みに関する記述については、指導開始1回目から3回目までのレポートに記述はなされていなかった。しかし、4回目の指導では、強い力や弱い力が記述されている。これは、能力の特性を踏まえて報告すること、さらに受検者の特徴が何なのかを示す視点を意識することが大切であると認識できたことが要因である。

6. 可能性と限界

わが国では非専門家にわかりやすく伝えるための講座や先行研究は見当たらず、これがアセスメントレポートを難解にしている要因の一つと考えられる。

指導教員に現実のケースについてのアセスメントレポートを提出するたびに、それでは能力の特性が理解できないと玉碎され続けた。これは、測定対象である能力のメカニズムを理解する基礎力がないと能力の特徴を端的にレポートできないということが原因であった。これを改選するには、基本知識の獲得と継続的なトレーニングが欠かせず、スーパーバイザーによる一定のフィードバックを受けることが必要である。

今後は、個人の理解度に左右されにくい効果測定をする一定の尺度を開発することが課題である。